

末黒野

すくろの

4月号 (通巻860号)



春寒し

寒灯や天金くすむ智恵子抄
崖道の展けて海や八重水仙
夕日の色胸に留めて枯野道
裸木に星裸木の細けれど
冬木の影にわが影重ね孤独なる
冬の海その静けさを独り占め
長き影踏めば影逃げ冬の浜
風光る松韻籠もる御用邸
春寒し池の小石の苔むして
郵便受けまでの六歩や汎返る
町川を流るるひかり春めきぬ
下萌や髭題目の碑の大

松本三千夫

牡蠣打

黒滝志麻子
(副主宰)

着水の光を散らし鴨数羽
日向鴨機嫌の尻を振りにけり
羽音よりはじまる池や初明り
犬の字のちぢみて乾く吉書かな
決まる道決まる社へ初詣
枝ひとつ飛んでまた飛ぶ初雀
年新た日差しへ一つ椅子を置き
揺るる葉の池に映りぬ寒四郎
ちやんちやんこ善人らしくなりてをり
牡蠣打や島のどこにも風の音
降りてやみ止みて降る雪遊園地
松の葉の律義に雪を置きにけり

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

除

日

石 黒 興

平

白

鳥

田 中 眞

石



羽子板市売手買手の三世代
羽子板市暮れて人出の華やかに
幸せの包み羽子板市の帰路
数へ日や水もて掃ける魚市場
発電機のひねもす音や飾売
青菴の香りを展げ注連飾る
ブレーカー落ちて騒ぎの除日かな
雲ぬげばかくも眩しき初日かな
毎日が佳き日に見えて新暦
一振りにこむる力や斧始

清

晨

森
清

堯

霜
の
声

森
清
信
子

先延ばしの約ばかり増え十二月
些事なるもすぐに済まさむ年の暮
一天の雲重たさう大晦日
ブラインド一気に上げて初景色
西窓を額の初富士祝膳
秀を競ふ落葉松並木初茜
やはらかき光あまねし初景色
清晨の息ふかぶかと大旦
よく通るコーキの声や寒の入
冬満月巨きく載せて安房の山

初春や太き枝張る五葉松
銀箔の富士の頂淑氣満つ
車より彩りこぼれ春着の子
恙無きを喜び合へり初句会
星空の音なき世界霜の声
グランドを均す少年冬夕焼
夕照のかけらをまとひ朴落葉
裸木や転がるやうに駆くる子ら
風はらむ帆は沖へ出で冬鷗
棒読みの如き暮しや冬ごもり

冬木の芽

安 斎 久
英

冬紅葉映す早瀬の櫓音かな
したたかに湯宿の軒端夕しぐれ
車椅子の背に話すや霜の道
葦枯れて沼は風音ばかりかな
満天の星研ぐ峠の虎落笛
真向ひに寒オリオンや湖の闇
稜線の闇深めをり冬の月
恵方道辿る潮の香総身に
富士を背に秋谷立石冬茜
初日待つ雲の縁どり菊水に



乙 矢 集

配列は音順
（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

ミルクティイ

齊藤マキ子



街の灯を容れて凍てつく夜の川
粕汁の熱きを分かち家族たり
同じ場所同じ顔して飾壳
水搔は常に休まず浮寝鳥
乗れさうな雲ふうはりと初御空
筆始象は鼻もて戌と書き
松過ぎの客と茶の間のミルクティイ

新暦

菅野日出子

風の色

堺昌子

たはむれに鍵盤叩き待つ聖夜
プランほど進まぬ掃除新暦
豆柿に鳥かげのなき空の碧
囲ひ葱抜くやかはたれ刻の月
寒月やタクシードちの長き列
月光へ客送り出す二日かな
二粒の草石蚕残るや三の重

里山の日を存分に冬紅葉
夕日影池面を移る鴨の陣
休み田の風の色とも冬芒
子や孫の一人も欠けず雑煮膳
初日の出をろがむ指のささくれて
七草粥の芹たたく音妣の音
百合鷗シーバスへ手を振り返す

惠 方

吉田きみえ

切山椒

岡田史女

八方に斜散りけり山眠る
躡ける小石の先の恵方かな
笛子鳴き森の深さを明るくす
竹さやぎ見下ろす渓の冬紅葉
落暉いま枯野づたひの貨車長し
落ちてなほ紅濃き雨の冬椿
枯るるもの枯れ日溜りのすべり台

元 朝

今村 千年

正 月

岡野里子

風花や画廊を巡る裏通り
古書店を出づや神田は風花す
あの人のかい句に出合ひぬ冬ぬくし
元朝や街の高みの富士見台
元朝や富岳阿夫利嶺ひかり合ひ
子ら集ふ年酒そのまま酒盛りに
嬰児はや石段數ふ初詣

盆は薩摩切子や大旦
少年の素振り二日の風の中
輪飾りをかけて自転車三輪車
休日は素顔で通す切山椒
金婚の喜寿と傘寿や數柑子
朝夕の日課五千歩寒に入る
菰ぬちの彩のきはだつ寒牡丹

いらご崎

今
村
千
年

さざ犀露露鰯潮鳥掌説い桜梅曾
しわ星座座飛子騷引の法くよが我
ばわの仏仏ぶのきスのさり香墓所
舞ざ遠の実のて佳なや所も御殿
ひわき耳法実寄のマ境き桜斜陽
日わふ朶衣朝せへホ七へゆ場
シ重るや自の入年渡か線
ナさ秋ののし一在滑りのるりも
海と冷緩海諸船やるぬ花渡の梅
に潮時俄び平花明い目見寓の
沈風甘雨か紅らとら易ご借借かし居な
みけ蔗けな葉なべり刈りる晴るらし崎時時な舟跡か
り刈りる晴るらし崎時時な舟跡か

初

音

及川照子

埋木渋送外銀銀甲土文荒戦桜紙瀬
みの柿りに河ぶ斐臭人磯な散雛音
火瘤や火出濃らのきののきる目よ
をに悪のできの里風ゆ波世鼻り
お妻消て賢ブ葡のかを知の時
こ夕え風治ラ萄連り永覽
日たにのジ高無折
しつつ棚れのらに
のる流里ルきく拾
親た空せの珈よ来湯へ若
寒かやるい琲りる宿もてふ
しも星秋で秋黄夕夜立武
峡風知ひ思湯う昏立半夏具
の寒れとかからるかのか飾の美か
宿しづつなならるな夏なる文女な

炎

帝

外山生子

晩足ゆ立秋秋雲風炎梅青山た畦浮
学元つ冬の日重の帝雨葦里かんを氷
にたや日差く道の明のな塗日
の枯り米の畠風さ飲と刈泳を
急葉と研遍ぬ冷がみらみ翁彈
が転雲しくやどみなれぎき
が流流寺もか見に川伸のつ
ぬがる水のもか見に面びりユ確つ
るるの屋るやえけ雷のツクと揺
道駅や手根二ス極り鳴光や兒鍬れ
や舎小にの人を暑物轟りかのさて
冬か六硬反の待かのきけ鯉背ばを
桜な月くり座ちな影ぬり幟ひきり

処方箋

正谷民夫

処 冬 踏 夜 眠 秋 茅 悲 バ 秋 殺 歌 太 阿 さ
方 天 む 神 剤 天 屋 し 斯 立 し 垣 宰 蘇 く
箋 の 影 樂 を よ 根 み 停 つ 場 の 忌 五 ら
あ の や 母 り を を に や に 山 や 岳 散
の や み に 降 ず ご 未 秩 抛 分 梅 次 る
薬 ふ な 割 ぶ つ だ 父 る け 雨 つ 鉄
よ き 錏 高 と と 来 蝶 ぎ 砲
く ほ 美 女 跳 濡 武 御 入 二 暮 狹
効 ど 命 や び ら 薦 ぬ 甲 捻 れ つ れ 間
の き る の シ め バ
く 蒼 冬 の 夜 人 て て ス は り ば 繻 て の
十 さ 日 指 半 と 秋 鶏 原 石 夏 揚 れ 麦 丸
二 か か 太 の バ の 頭 爆 の 芝 羽 み 匂 四
月 な な き 秋 । 雨 花 忌 山 居 蝶 て ふ 角

紅

梅

森

枝

菊 飯 棉 故 廃 吾 夕 河 活 夕 灯 ま 校 青 初
人 盛 吹 鄕 校 が 櫻 川 け 刊 をん 庭 竹 東
形 山 くを の 肩 敷 ら や 入 さ に 風
の の の 映 の れ 沈 れ く 真
案 に に す サ て 丁 て の 向 柄 五
紅 や 忽 窓 芽 ッ 花 紅 花 き 构 山
内 葉 雲 と 鳴 吹 川 力 の 梅 の の
の の 且 吹 川 力 菜 梅 の 背 の 空
ご か 近 ら く 面 い 満 の 調 き 香 の
つ と 散 煙 づ し 柳 の の 開 色 ふ 香 の
く くる かけ を や 薄 ら 早 深 深 微 て 雲
武 苦 遠 遠 り 妻 風 め ま め 風 水 置
家 む す 浅 閑 青 簾 明 光 け り け か 仙 初
屋 敷 碑 間 古 嵐 宿 り り て り な 花 詣 ず

一

故

郷

長尾タ
イ

葱 凸 反 母 た 隠 蒼 溪 伽 雲 奥 さ 幼 水 春
畑 凹 射 に た 沼 き 流 羅 の 信 緑 子 温 耕
敵 に 炉 似 み の 山 落 上 置 を の む や
剥 へ 案 来 音 蒼 浅 猪 浮 残 鯉 大
盛 き 続 案 る な 浅 波 き 口 か 雪 泥 の
り し 子 波 き 瀬 口 か 雪 泥 の
上 十 く の 流 に ぶ 芽 に 鮎 鼓
十 と の 水 に 溢 浅 光 柳 握 も 動
ぐ 粒 農 交 秀 脈 れ 放 間 水 る 髭 打
る 道 は 先 の 放 間 水 る 髭 打
の の や や つ る 嶺 山 の 春 生 ち
老 栗 豊 国 鳥 夏 鮎 越 花
農 御 の 言 渡 の の 凹 の 林 の 綺 の や 返
夫 飯 秋 葉 る 鴨 里 鮎 酒 檜 襻 羅 風 し す

梅雨の星

宮元陽子

札落秋後百切欠宵夏母米頭風燕花
納日深の穴りけ闇薊逝艦上騒く三
人の風し月に取もや葉きのよぐる分
人風黒堀にる寺擦て去り藤木蓄
形か風やぬせのれ旧り雲棚を
雲らに葡萄の姓春材
不猿敷音途急色撫
可一映葡萄のの店
可朵せれ渡ずシと絶波の降香づ
と冬てるりし腰ヤ木ゆ下広のる
筆車掛シ梅戻
立城と野デれ雨り風げ檜川
太夫の低花掌分り日のけ光けのの
にり足き芒に後アと星りるり香風

竹の秋

山口 郁子

初ま小ひ玄バ行新雨汗寺泊そ風和
詣れ春と関スキししかの犬よの毛
願び日りに停合しきとくに庭に風けく
とに居子のひと予の不の風どス人日の日辛
ひと予の不の風どス人日の日辛
渦尽後温メ揃切知百マの捲矢夷
れれ日ホ斑のの
巻きのみモひるの四るの抜花
くぬ身奪ののぎ紅棋葩貞け花
くぬ身奪ののぎ紅棋葩貞け花
話預ふあ椅の花紅ととばやゐ芽
宮やけやり子雲すし駒傘れ目竹び
居相深隙今紅風すし合
か炬呼間年葉はすづはの青借のを
な燧吸風米冷秋きくせ花楓時秋り

山笑ふ

山咲和雄

玻山落男朝鎌肩終畦父時混登指春
璃好葉体霧も書り道の鳥ぜる山先炬
越き急山やたなを日の寿歴背
しのスキ今きを司に意
少クき日無事行や次に五す
に少クきの蟠と考のそぢ
鳥しラし天蟬き知のふる十へ
うんに氣出幾りつ声投
のきブまをづつ写花數せ
影うルさう年つり戻待菜合
おきのるたるに真年
き雪交山が植や草つ乾溪ら旅
春の差紅は木心引夏杯深し笑か
隣朝点葉ず鉢太く燕すしへふな本

みちのくへ

及川照子

秋うらら胸に描ける旅の地図
爽やかなる風と語らむ一人旅
鬼の子の気ままな一人遊びかな
天高し石の上に立つ立石寺
御仏のみそなはす山装へり
秋冷や崖また崖の修驗道
嶮崖の仏の慈顔忍草道
ご朱印の墨の香りや秋の風

三代の栄華の香とや
水澄むや風のささやく淨土池
落日や古戦場めく敗荷田
秋寂びし心に平家物語
人秋絵旅わ色鳥灯秋
人生霖蠟のた変渡を消して濁世離れて虫の夜
のや燭のたへぬ蔵王嶺遙か薄化粧
午後ひ燭のみの松の参道津波の碑
後をひとり夫に過ぎき眠りや台風の碑
豊か籠りゆく速さ台風の碑
ににてる夜速や台風の碑
吾旅寒さ台風の碑
亦日か鰯風の碑
紅記な雲過碑

青炎集

松本三千夫選

横浜 芝田幸恵

横浜 早川八重子

冬 天 へ 人 汲み 上 ぐ る 観 覧 車

セーテーを脱ぐ折伏のさまに脱ぐ

白妙の高嶺まどかや初景色
初笑にぎにぎしきは出の離子
白湯飲みて腸を宥むる三日かな
明けどきも暮れどきも鋭き寒鶲

冬晴れや小女の髪のつややかに
路地裏の日差しやはらか冬董
肩の荷を下ろす如くにコート脱ぐ

曇天の垣を色どり冬椿

柚子の香の厨に残り年用意

切株の年輪美しく冬日向

横浜 及川照子

横浜 北郷和顔

七転び八起きの年を惜みけり
海からの風まだ硬し水仙花

歌留多取りの櫻にかかる勝負かな

霜柱をボールに見立て男の子

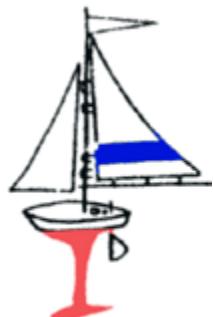
古民家の手斧の梁や竈猫

菰藪に潮騒聴くや寒牡丹

ほどほどの幸を祈りて注連飾る

海老藏のにらみ壮快初芝居
年毎に妣似となりぬ初鏡

初富士の裾伸びやかに相模湾
孫二人の名を揃へるや箸袋



横 浜

聞 せ つ

横 漢

布 施 由 岐 子

落葉して己の空をとりもどす

薄紅の冬芽の尖り明の空本
みどりごの通訳欲しや日向ぼこ

月冴えて三千世界鎮まれり

冬夕焼宇宙の果てを誰も見ざす

真夜中の社賑ひ初詣

音たてて火の粉夜空へ初詣

横 浜

前 原 マ チ

稻 垣 佳 子

柚子の寄附募る錢湯明日冬至

近隣に支へられたり去年今年

舞ひ終へて口に祝儀や獅子頭

神木の間を初日手を合はせ子直

蒼天や白き鳥居の北風に建

追悼 小山直子さんひたすらに夫君のもとへ冬すみれ

横 浜

有 賀 鈴 乃

田 中 繁 夫

温室の充つる色香や日の燐と

祭壇へ絵硝子越しの冬日かな

会場とプリマと和せる聖歌かな

茜雲の紫に溶けからつ風

神木の紙垂の真白や年用意

砂浜の長き影踏む冬茜

迫り来る忘却の波去年今年

石鉢の猫の水場に蟬水

旅の宿軒の氷柱に手を伸ばし

海原の沖行く舟や水仙花

耕

土

集

黒滝志麻子選

蕪麦打ちや赤き櫻の大晦日

横浜 高橋 泰子

故郷のなぐて吊すや干し大根
旅に出て朝湯に交はす御慶かな
寒夕焼に染まる駅前未来都市

午後からは雨となるらし寒ゆるむ

さりげなく居酒屋に入る冬帽子
パン皿の埃の白き冬至かな
冬至湯や常より長く手足のベ
赤玉をひきて微苦笑年の暮
薪の火のくづるの音や除夜の鐘

横浜 吉藤 章

日溜りの少女の像や冬薺薇
ビル群を映す池の面花八手

白壁の長屋門映ゆ冬桜
蹲踞の水音やさし年の暮
筆太の無事の掛軸冬座敷

横浜 渡辺美智子

足裏にも思ひ出のあり落葉踏む
一輪の水仙部屋を正しうす
表札の古びしままや初日受け
手術後少し濃い目の初化粧
歌かるた孫に負けじと恋の歌

横浜 渡辺美智子

月汎ゆる嘘も氣取りも許さじと

横浜 池乘恵美子

冬帽の似合ふマネキン膨深し
前垂れの福の一文字飾壳
億の子の億の夢ある聖夜かな
初夢や若きこに励まされ

孫の手も借りて一先づ年用意
鳥一羽一声高き先序ゆる
臘梅のふつくら匂ふ日和かな
はらからの疎開話の年始かな
牛日やパンダ横目に美術展

横浜 滝口 洋子



雪 兎

小 川 玉 泉

(名譽顧問)

初御空掲げし国旗ひるがへる
手放せぬシリバーカー や年迎ふ
中庭の池面を残し積る雪
千両の紅を目に雪兎
日を浴びてずしりと落つる下屋の雪
湯たんぽを頼る齡となりにけり

雑記帳 9

今年の寒さは地球の北半球を包むほどである。湘南の海沿いも、雪に包まれ、人智の及ばない被害を受けた。地球の歴史からすれば些細なことだが、今を悔いなく生きたい。